

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

キリスト・イエスの霊生

——マタイ伝第27章45節～28章20節——

1978年3月26日

小池辰雄

義の叫び 勝利の呼ばわり 皆既月食 愛の声 与える義 四大元無主 キリストの霊生 南
無キリスト 懼るな疑うな 活現・新生 ペンテコステ

【マタイ27】

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、二時に及ぶ。46 三時ごろイエス
大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』⁴⁷ と言ひ給う。わが神、わが神、
なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。⁴⁸ そこに立つ者のうち或る人々これを
聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』⁴⁹ と言う。48 直ちにその中の一人はしりゆき
て海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。49 その
他の者ども言う『さて、エリヤ来りて彼を救うや否や、我ら之を見ん』⁵⁰ イ
エス再び大声に呼わりて息絶えたもう。⁵¹ 視よ、聖所の幕、上より下まで裂
けて二つとなり、また地震い、磐さけ、⁵² 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體
おおく活きかえり、⁵³ イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多
くの人に現れたり。⁵⁴ 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地
震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『⁵⁵ 実に彼は神の子なりき』⁵⁶ と言えり。
55 その処にて遙かに望みいたる多くの女あり、イエスに事えてガリラヤより
従い来りし者どもなり。⁵⁶ その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフ
との母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもいたり。

【マタイ28】

5 御使、こたえて女たちに言う『なんじら懼るな、我なんじらが十字架につ
けられ給いしイエスを尋ぬるを知る。⁶ 此処には在さず、その言える如く甦
えり給えり。来りてその置かれ給いし処を見よ。⁷ かつ速かに往きて、その
弟子たちに「彼は死人の中より甦えり給えり。視よ、汝らに先だちてガリラ
ヤに往き給う、彼処にて調ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』
8 女たち懼と大なる歡喜とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんと
て走りゆく。⁹ 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』¹⁰ と言ひ給いたれば、進
みゆき、御足を抱きて拜す。爰にイエス言いたもう『懼るな、往きて我が



兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処にて我を見るべきことを知らせよ』……
 16 十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給いし山にのぼり、¹⁷遂に調
 えて拜せり。然れど疑う者もありき。¹⁸イエス進みきたり、彼らに語りて言
 いたもう『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。¹⁹然れば汝ら往
 きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテス
 マを施し、²⁰わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世
 の終まで常に汝らと偕に在るなり』

● 義の叫び

「復活節」というのは3月22日以後の満月の次の日曜日ということ、今年是非常に早い
 ですね。このキリストの復活は十字架なくしては考えられない。そこで今日はマタイ伝を
 中心にしてやります。マタイ伝27章45節、

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、二時に及ぶ。⁴⁶三時ごろイエス
 大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給う。わが神、わが神、
 なんぞ我を見棄て給いしとの意なり。

「神さま、どうして私をお棄てになつたか」

というわけです。義人キリストが棄てられるわけがない。世の中に不合理なことは、これ
 以上のことはない。いろいろな人が迫害に遭います。不当な仕打ちを受けます。けれども、
 その不当な仕打ちの最大なもの、キリストの十字架であった。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

と。これは義の叫びです。ヨブが自分の義を主張した。そして神さまに食いついた。エレ
 ミヤが

「義人がどうしてこんなに苦しまなければならぬか」

と言って、神さまに取っくみました。預言者たちがみなそのようなことであつた。それか
 ら後の殉教者たちもそうです。キリストは、もしそういう範疇でいうならば、最大の殉教
 者です。キリストの義がひっくり返るならば、天地は成り立たない。歴史は成り立たない。
 成り立たないことが起きた。機軸が折れるように。神さまはそういうことをなさつた。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

「それは義の叫びである」ということを忘れないでください。聖書の創世記から黙示録まで
 貫いている縦の線は義なんです。

47 そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて『彼はエリヤを呼ぶなり』と言う。

48 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き葡萄酒を含ませ、葦に
 つけてイエスに飲ましむ。

これは多少、痛み止めの気持です。



49 その他の者ども言う『さて、エリヤ来りて彼を救うや否や、我ら之を見ん』

「エリ」と言ったものだから、エリヤかと思つた。エリヤとは旧約の非常に霊的な預言者です。450人の偽りの預言者を相手に彼は戦つて、靈闘で勝つた。イスラエルの中興の預言者です。彼が戦わなかつたら、イスラエルの信仰はどうなつたかと思うほどの大事件であつた。「エリヤ」というのは「エホバはわが神なり」という名前です。エリヤの「ヤー」を取つて、「エーリー」「わが神」と、そういう半分嘲りの気持で言っているわけです。キリストは酸き葡萄酒なんて受けとりやしない。

●勝利の呼ばわり

50 イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。

何を呼ばわれたか分からない。これはもう内容以上の霊的な、異言的な霊言です。これは今度は、ある意味において、勝利の呼ばわりです。なぜ勝利の呼ばわりかというところ、

51 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、

キリストが霊言を発したならば、聖所の幕が裂けてしまったという。大変なことです。即ち、旧約宗教はそこで廃棄されたということです。大祭司がこの至聖所で毎年一回、執成しの祈りを小羊の犠牲と共にやっていた。そういう雛形宗教はもう要らん。彼自身が大祭司であり、彼自身が羔である。十字架上にほふられた。だから、旧約は満たされ、かつ廃棄された。そういうわけで、この大声によつて聖所と至聖所の間の幕が二つに裂けてしまった。まあ、素晴らしいことです。もうこれを冥想するだけでも、大変なことです。

また地震い、磐さけ、

これはもちろん霊震です。

52 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おおく活きかえり、53 イエスの復活のち

墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。

大変なことが書いてある。キリストの復活に伴つて、その後このことが起きる。こここのところはちよつと時間がある。

54 百卒長および之と共にイエスを守りいたる者ども、地震とその有りし事とを見て、甚く懼れ『実に彼は神の子なりき』と言えり。

キリストは神の現象体であつた。キリストは神を現した者だから神である。また、神の子としての自覚を持つておられた。神の子であり、神であるということは、決して離すことのできないものなんです。キリストを見ないでどこに神が見れるんですか。

●皆既月食

45 昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて



とある。

こないだ、3月24日の晩11時半から25日の零時半くらいにかけて、皆既月食が実によく見えたね、一点の雲のない空に。40何年振りにしか来ないんだから、あれを見損なってはしょうがない。地球が太陽の光を妨げて、地球の影が月に映って、お月さんが左からだんだん欠けていって、全部欠けて、今度は右からまた現れて来た。私はじつと見てました。あれを見て、

「地球は黒いなあ」

と思った。今この地球は、この世界は暗黒である。その象徴のように見えた。この世界という暗黒が月の光を隠してしまった。実に20世紀の終りの象徴みたいに思った。21世紀は果たして無事に来るか、わからんです。地球が本当に義の地球であれば、太陽の光を吸い込んで、そして月に影を映さないということまで終末的には考える。

そういう、キリストが十字架にかかられた不合理窮まりないことが起きた。天地は晦冥となった。こないだの3月24日はちょうど金曜日じゃないですか、十字架の金曜の夜じゃないですか。だから、十字架上のキリストを象徴するような暗さです。

●愛の声

もちろん、キリストは十字架上で

「なぜ、お棄てになったか」

という言葉の他に、「十字架上の七言」ということをいつか話しましたが、その中で大事なのは、

「彼らは為すところを知らず、その罪を赦し給え」

という言葉です。「なんぞ棄て給いし」という義の叫びと、

「彼らを赦してやってください」

という憐れみ、愛の声。絶対矛盾の自己同一という。これが即ち、贖罪ということ。この義と愛がなければ、贖罪ということは成り立たない。

相対的には我々人類が、その時の人たちがキリストを十字架に付けたけれども、これは敵も味方もありはしない。ローマの官憲も、学者も、祭司も、民衆もみんなキリストを十字架にかけた。けれども、十字架にかけられた相対的な歴史的事実を啓示の事実として、キリストは、

「自分でかかるんだ」

と言われた。自分でかかるのに、なぜ

「棄て給いし」

なんていう矛盾したことを言うか。それは神の義の叫びを言わざるを得ない。「義」とは、神の聖意を100%に行ずることを義という。「義人」とは、神の意志を100%に行ずる人である。



この
「どうぞ棄て給いし」
ということとは、

「この事実をあなたは否定なさるか」
というほどの意味です。逆説的な言です。キリストはその奥をちゃんと知っていらつしやる。
「これは自分がこの義を人のために罪の贖いとして神に献げる」
と。審判される必要のない人が審判された。審かれました。別な言葉でいうと、「どうぞ我を棄て、給いし」ではなくて、

「どうぞ我を審き、給いし。私は審かれることはないじゃないですか」
ということだ。人の審きを受けた。罪の審判を受けた。パウロの、

「我はキリストと偕に十字架せられたり」

とは、苦難を受けたということではなくて、キリストと共に罪の処分を受けたということ
です。

「私というこの自我的な罪が完全にキリストの十字架において処分された。だから、
自分は、もはや罪が完全に処分されたから、そういう生まれつきの自我的な我は
もう死にました」
ということ。

「われ生く、されど我に非ず」

と。もう自分はキリストの審きに合つて死んだ。イザヤ書53章でもみんなそうです。

「我々の不義のために碎かれた」

という。罪を背負ったんですから、アザゼルの山羊のように。ということは、キリストの
十字架の上のもう一つの言、

「彼らを赦し給え」

とは、

「私が背負いましたから、赦してください」

ということ。罪を背負わないで「赦し給え」なんて、そんな呑気なことを言っているんじ
やない。罪無き者が罪有る者のために、

「我執の代贖をやったから、だから、赦してやってください」

という。これは神さまはちゃんと聴き入れられた。

●与える義

「主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給え
なり」(ロマ4・25)

とある。罪のために十字架につき、我らが義とされるために甦つたとパウロは言いました。



即ち、

「なんぞ我を棄て給いし」

というキリストの義は、今度は復活によって我々に与えられるわけです。義という觀念じやないですよ。義という実体、実力です。

復活の生命が来ると、「永遠に生く」とか「永遠の生命」という言葉が、へたすると時間的な意味にしかとれないなんて、そうじゃない。永遠というのは質的な意味ですから。滅びないことです。この、

「義が与えられる」

ことはなかなかルッターも始めは読めなかった。義というのは審判ばかりだと思っていた。今度は「与える義」であった。それは十字架という土台がなければ、罪の赦しがないれば、与えられるということは無いわけです。罪の赦しとは罪からはずされること、罪からぬけてしまうこと。脱罪だ、そんな言葉はないけれども。

皆さん、うれしくないですか、こういう音信は。

「まだそれでも、私はどうもしようがありません」

なんてね、我々は死にいたるまでしようがないよ、自分なんか見てたら。しようがない奴をしようがなくしてくださるんだ、内側から。二重構造だよ。二重構造で内側は必ず勝つんです。どんなにすべつても躓いても転んでも、それだけの凄いものなんです。こつちの信念とか、自分の信仰なんてことを言っているうちはダメですよ。キリストの霊が、キリストの義が、キリストの愛が主体となっていく。そういう十字架のキリストをぬきにして、自主だの自由だのと、とんでもない。キリストが私たちの自主となり、キリストが我々の自由である。

十字架は義の叫びと愛の声、そのクロスしている焦点なんです。義は縦の線、愛は横の線。その中心はもの凄く光っているんだ。十字架は本当は真ん中は描かない。どうして、これ描かないんですか。光ってしまってもならないから。すぐそういうことが私は話していると思いつくのはどういふことだろうね。こんな十字架は初めて描いた。

●四大元無主

それで今度は、復活のところに来ますけれども、もう少し余計なことを話そうかな。

今から千五百何十年前だな、シナに僧肇という人がいました。これはもちろん仏僧です。彼は羅什三蔵の門下で、三千の門下がいたそうですが、パウロと同じように、ガマリエルの弟子パウロが優れた弟子であったように、この人も優れていた。ある事柄で不当な審きを受けて、とうとう斬罰に遭う。そうしたら、この僧肇が七日間猶予してもらいたいと言った。彼は七日間で、獄中でもって「法蔵論」というのを書いた。そして、従容として刑場の露と消えました。その遺偈に、遺言みたいな絶句に、



「四大元無主

五陰本来空

以首臨白刃

猶如斬春風」

とある。地水火風の元は、

「四大は元主無し」

という。それ自身が根源であるという意味です。

「五陰」というのがある。それは本来空である。「五」と言いつても、帰するところ空である。「色即是空」の「色」に当たるところの「五陰」です。

「首以て白刃に臨めば」

首をさあお斬りなさいと言つて白刃に臨めば、

「なお春風を斬るが如し」

春風をすつと斬つて斬れるかと。私の首はそんなもので斬つたつて、首は飛んでも本当は飛んでないんだ、涼しいもんだと。

吉田松陰が、

「何処んぞ氣、体に従いて腐乱壊敗することを得んや。必ずや後の人をして、また余を

見て興起せしめ、七生するに至りて然るのち可とすべきなり」

と言つた。斬られても、

「何処んぞ氣、体に従いて」

の「体」というのは、パウロがコリント前書15章で言っている

「血氣の体あり、靈の体あり」

の「血氣の体」だ。

「氣、体に従いて腐乱することを得んや」

と。「氣」は腐つたり崩れてだめになつてしまうことがあり得るか。自分は七度生まれ変わつて来るぞと。「七生報国」というのは楠木正成の精神ですが。

「ああこれ我に在るなり」

これが本当の私の本質だ、死んでも死なないぞと。

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置まし大和魂」（留魂録）

「呼び出しの声待つ他に今の世に待つべきことの無かりけるかな」

これは辞世の最後の歌の一つです。

「このほどに思い定めし出立をききょう聞くこそつれしかりける」

10月27日の絶筆です。

「もうこれで私は言うことはない、喜んで……」

と。そういうように、彼らは本当に死んでも死なないような魂です。



●キリストの霊生

況んやキリストは、

「なぜ、私をお棄てになったか」

「彼らを赦してやってください」

と言われた。それで旧約の宗教は廃棄されて、至聖所の幕が二つに切られた。まあなんと、キリストの霊生というものはもの凄いか。もうヨルダン川の洗礼の時から十字架まで、言っていることとして置けることは全部キリストの霊生の現れです。

まず、どれくらい今のキリスト教は間がのびているか。聖書の世界がそんな凄い世界だということ、何で読んでいるか。頭で、研究で読んでいる。バカだよ。

皆さんは、本当のバカなら大愚にならなければダメだ。使徒たちが受けた霊の力、キリストの霊の生命、これを受けなかつたら、「キリスト教」なんていうのはよしたらい。 「クリスチャン」なんていう看板は降ろしたらい。 なにも集会を開く開かないじゃない。

誰でもが、その本当の根源現実に魂を置けば、そうしたら、あなた方は何をしようと本当の力が入って来るから。

「よし、私はこれを生涯かけてやりましょう」

と。音楽の道であろうと、和歌の道であろうと、詩の道であろうと、大工仕事でも何でも、その道の本当の達人になれる。質的に。それはキリストの霊生をいただければ、そういうことになる。私はただ

「キリストは素晴らしい」

なんて言っているんじゃない。キリストの霊生を受けとらなかつたらつまらない。キリストは与えようとしている。義を与え、愛を与え、霊生を与えようとしている。義とか愛とか言ったって、キリストの霊生が本当の義を来たらしめている、愛を来たらしめている。みんな神の御霊の力です。

マタイ伝28章5節から、

5 御使、こたえて女たちに言う『なんじら懼るな、我なんじらが十字架につ
けられ給いしイエスを尋ぬるを知る。6 此処には在さず、その言える如くよみが甦
えり給えり。来りてその置かれ給いし処を見よ。

新約聖書の口語訳は、何でもかんでもみんな

「あなた方」

という言い方ですね。たまには

「お前たち」

と書いたらいい。「あなた方」なんて言われると、私はくすぐったくなっちゃう。

「お前」

と言われた方がよっぽどピンとくる。



「甦よみがえる」という字は「エゲイロー」という字ですけれども、

「目覚める、起き上がる」

という意味で、目覚めて起き上がるような字です。ここところはアオリストのパッシブで書いてあるから、「エゲルター」という。これは「甦よみがえらせられた」。キリストは神さまの力によって立ち上がらされたというわけだ。ヘブライ語でいうと、「クーム」という「起たつ」という字です。

「タリタ クミ(娘よ、起きよ)」

と言ったでしょ。あの「起たつ」という字です。

これも私は『無者キリスト』(小池辰雄著作集第一巻)の「ヤイロの娘」のところに書いた。「キリストの霊生一、二、三」として、「ヤイロの娘」と「ナインの若者」と「ラザロの復活」と三つ書いた。みんなこれは死人を甦よみがえらせてしまった。彼自身はもちろん神さまに立たせられた。もちろんキリストは神の力でみんなやるんです。

●南無キリスト

だから、私は

「無者」

と申し上げている。キリストは、

「私は何もできない。神さまの力が来て、やるだけのはなしだ」

と言われた。我々はキリストの力を受けとって、やるだけのはなしです。

「南無キリスト」

の「南無」というのはキリストの中に自分を投げ入れること。投げ入れるとキリストは働きたもう。

「往生」とは素晴らしい言葉だ。大往生です。私が死んだら、

「永眠した」

なんて絶対に書かせないから。眠りはしない。往きて生きる。

「往生しました」

だ。墓碑名には、

「汝、今日我と偕にパラダイスに在り」

と、それを大きく書いてもらおう。名前は小さくていい。

盛んなる哉、キリストの霊生です。復活の生命です。彼は甦よみがえらざるを得ない。どの福音書の終りの方にも驚いて書いているんだから。天使が現れて、弟子どもはまだうろたえて

「まだ信じない者もあった」

なんて書いてある。



皆さんは選びの器ですよ、こういう集会をやっているということ。このキリストの生命をいただいて、宣べ伝えないではいられないじゃないですか、証しないではいられないじゃないですか。そういうキリストは我らに真に義を与えている。しかしながら、与えるために甦ったけれども、さあそれでは、どうして与えられるでしょうか。それはペンテコステにおいてです。

そういう霊体をもつて現れてきた。ルカ伝にも書いてあるとおり、不思議な自在な在り方ですから。パッと消えてしまったりする。ピリポというのはエチオピアのカンダケに伝道して、彼は仕事が終わったら、パッと見えなくなってしまう。大変なもんです、復活のキリストと同じ次元に入れられた。そういうわけで、キリストの中への南無、祈り込みというものは、これは本当に毎日積み重ねていかなくてははいかん。どこでもいいですから。

● 懼るな疑うな

7 かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦えり給えり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり。女たち懼と大なる歡喜とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。

「懼れたれば人に語らなかつた」とマルコ伝には書いてある。とにかく、異常なことでつくわしたものだから。絶言絶慮という。ところが、

9 視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』と言ひ給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拜す。

イエスが「シャローーム」と仰つたので、マグダラのマリヤがしがみついた。ロダンがマリヤが十字架のキリストにしがみついているような彫刻をしたが——私は『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第二巻）の扉にその絵をつけたが——あれは本当は十字架ではないんだ。甦りのキリストだ。ロダンというのは大胆な芸術家ですから、ああいう表現をする。ヨハネ伝では、

「私はまだ天に往つてないから、私に触るな」

と仰つているところもある。マグダラのマリヤはやりきれなくなつてしがみついてしまった。

10 爰にイエス言いたもう『懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処にて我を見るべきことを知らせよ』

「懼るな」とは「疑うな」ということです。今の人はすぐ恐れたり、疑ったり、考えたり、率直に受けとらない。次元の違ったものが出てきたら、キリストの福音は次元の違つている世界だから、降参しなければ福音の世界には入れない。

「キリストの次元には参りました！」



と言うと、キリストが入れてくださる。

「来たれ。自分を立てて、どうのこうのと考えたり疑ったり恐れしたりしているうちはだめだ」

と。ペテロやヨハネやヤコブは、キリストと一緒にいた時は波のようだった。ところが、ペンテコステからあとはいらいらになってしまった。キリストの中に南無してしまったから。これはもう聖霊を受けると、はつきり違ってくる。古い自分がどうだこうだ、そんなことは問題でなくなる。相対的なことを問題にしている人は、いつまでたっても始まらない。だから、

「収税人、遊女の方が、お前たち偉そうな顔している奴よりか先に天国に往くぞ」

とキリストは言われた。

●活現・新生

それで、マタイ伝の一番終りに——これはまあ、学者は後から付け加えたと言っているんですけども——後から付け加えたって何だっかっていい。要するに、キリストの本願がそこにかかっている言葉であれば。

19 然れば汝ら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名に

よりてバプテスマを施し、²⁰ わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。

視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり』

あまり言葉が整いすぎているからね——これは信仰告白です——キリストは果たしてこう仰つたかは、それは分らん。分らんけれども、キリストの本願の気持は入っているとみていいわけです。

「我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」

「偕に」は「中に」です。「中に」がなかったら、「偕に」の意味はなさない。

「お前たちの中にいるぞ」

ということ。

「最早我生くるに非ず、キリスト我がうちに在りて生き給うなり」

ということ。キリストが私の中で生きていらつしやる。もちろん、御霊です。甦りのキリストが私たちの中に来たりて、私たち自身が甦らなかつたらしょうがない。むしろ、

「新生」

なんだよ。我々にとっては復活なんていうより、新生です。一体、復活という言葉が果たして合っているかどうかと思うけれども、熟しているから仕方がない。キリスト自身が私たちの中で活現したもう。そういう新生です。活現、新生であるわけです。



●ペンテコステ

この甦りの記事をあなた方は読みながら冥想して——これはドラマですから、そのキリストに会っている事態を冥想してください——そうしたら、マグダラのマリヤのようにしがつきたくなる。あるいはそこにぶつ倒れてしまう。あんまり凄いから。ぶつ倒れることと、しがつくこととは同じことです。そうすると、立ち上がるんです。降参しないと立ち上がれない。凄いなあというわけです。

我々はもう既にペンテコステは通っているから、この甦りの事態も本当に受けとれる。キリストの霊的波動が、御霊の力の波動が貫いて来るから。

まあ、皆さんも、いろいろ身体の調子の悪い時もあるでしょうね。福音書のキリストに来てくださいよ。あるいは、使徒行伝の事態に。祈るということはそういうことです。ただ

「治してください」
ではない。

「キリストさま、あなたの生命を！」
と祈る。そうすれば、知らないまに治ってしまう。現象を追求するんじゃない。根源を追求するんです。治ったって、治らなくなっただけじゃあないか、根源が生きていけば。現象の奥の世界で本当の現象が起きている。

何か物事にでつくわすとガタガタになる。それではダメです。でつくわせばでつくわすほど逆に強くならなければダメなんです。逆にキリストの霊生が生きて来なくては。本當に使徒たちの信仰の事態を私たちは証しせざるを得ない。

私たちに活けるキリストは正に何処においても出会いたもう。この十字架の贖罪を果たしたキリストは甦って、本當に義の生命、愛の生命を与えようとして、

「祈って待っている」

と言われる。それから今度は、ペンテコステになる。それまで四十日間、キリストは現れたもうた。何と言っても次元の違った事実です。そこに入っていかなければ。私たちは楽しくてしようがない。なんとうれしいことだろう、楽しいことだろう、力あることだろう。これは自分たちがただうれしがっているんじゃない。本當にこれを人に与えなければ。この曲がった黒い世の中に本當に光を与えなければ。今の青年たちがこの福音を受けなかつたらおしいです、正直。受けたら、どうぞ友人に、一人二人と伝えてください。

「来たりて見よ！」
と。終ります。

